

京都ファインアーツ・ブラス

Kyoto Fine Arts Brass
14th Concert

第14回演奏会

2007.3.4 (日) 午後 1 時 30 分開場 午後 2 時開演
文芸セミナリヨホール

主催：京都ファインアーツ・ブラス
共催：文芸セミナリヨ（財）安土町文芸の郷振興事業団



ごあいさつ

本日は、京都ファインアーツ・プラス第14回演奏会にご来場いただきまして、誠にありがとうございます。

京都で第1回演奏会を開催してから、早くも13年目を迎えようとしています。私たち団員を取り巻く環境は、社会に於いても家庭に於いても年を追うごとに変化してきておりますが、音楽に対するひたむきな気持ちはなんら変わることなく、私たちのアンサンブルは、みなで過ごした時間の分だけ深みを増すようになってきております。

今回、一人のメンバーがこの文芸セナリヨのオルガンと出合ったのをきっかけに、かねてから望んでおりました、金管とオルガンの共演を、(財)安土町文芸の郷振興事業団のご協力を得まして実現することができ大変嬉しく思っております。文芸セナリヨのオルガンとガブリエリの作品を演奏できることを、私たちは大変意味深いことであると理解し、今日まで練習を重ねてまいりました。また2006年、今日のための練習に着手したころ、私たちの思い入れ深い作曲家の訃報が相次いで届きました。本日のプログラムの中には、そうした作曲家への追悼の意を表し演奏するものもございます。本日も来場の皆様と、アンサンブルの素晴らしさはもちろんのこと、出会いや別れ、喜びや悲しみを音楽を通じて感じながら、素晴らしい時間を共有できたら幸いです。どうか、最後までごゆっくりお楽しみください。

最後になりましたが、本日の演奏会を開催するにあたり、各方面からご支援、ご協力いただいた皆様方に深く感謝すると共に、厚く御礼申し上げます。

京都ファインアーツ・プラス



Program



G . ガブリエリ : 第 9 旋法による 12 声のカンツォーン
Giovanni Gabrieli : Canzona noni toni a 12

J . デ・プレ : ミレ・レグレ
Josquin Despréz : Mille Régretz

A . ガブリエリ : 第 12 旋法による 4 声のリチェルカーレ
Andrea Gabrieli : Recercari del duodecimo tuono a 4

J . S . バッハ : カンタータ 147 番より「主よ、人の望みの喜びを」
Johann Sebastian Bach : Kantate BWV147

J . S . バッハ : パッサカリア 八短調 BWV582 《オルガン独奏》
Johann Sebastian Bach : Passacaglia C-moll BWV582

R . シュトラウス : ヨハネ騎士修道会の荘重な入場
Richard Strauss : Feierlicher Einzug der Ritter des Johanniterordens

Pause

J . ヴァン・デル・ロースト : 金管 5 重奏とオルガンのためのイントラダ
Jan Van der Roost : INTRADA for Brass Quintet and Organ

G . バルボトゥ : シャンソナリ
Georges Barboteu : Chansonnerie

N . J . レーメンス : 祈り《オルガン独奏》
Jacques-Nicolas Lemmens : Prière

E . ジグー : トッカータ《オルガン独奏》
Eugène Gigout : Toccata

J . クツィール : 教会ソナタ
Jan Koetsier : Sonata da Chiesa Op.146



オルガン共演

城 奈緒美



神戸女学院大学音楽学部パイプオルガン専攻卒業。滋賀大学大学院経済学部修士課程修了。オルガンを井上圭子に師事。スイス、スペイン、イギリスなど国内外の国際オルガンアカデミーにて研鑽を積む。文芸セミナリヨ専属オルガニストとして、文芸セミナリヨを中心に国内のコンサートホールや教会などで演奏活動を行う。

オルガンという楽器を身近に感じていただきたいと、お話を交えたコンサートは特に好評を博す。コンサートの企画・運営に携わる他、後進の育成にもつとめている。

日本オルガニスト協会、日本文化経済学会、各会員。

演奏曲目について

ジョヴァンニ・ガブリエリ：第9旋法による12声のカンツォーン

Giovanni Gabrieli : Canzona noni toni a 12

ジョヴァンニ・ガブリエリは、1554～57年頃ヴェネツィアに生まれました。今回のプログラムで取り上げるアンドレア・ガブリエリの甥にあたり、幼少の頃からアンドレアのもとでオルガンと作曲の英才教育を受けました。その後、ミュンヘンのフランドル楽派の大家ラッスス(ラッソ)の助手をして対位法を極め、1585年からアンドレアの後任としてサン・マルコ大聖堂のオルガン奏者になりました。

彼の功績は、器楽作品を声楽の延長ではなく、純粋に器楽的なものとして着想し、初めて強(フォルテ)弱(ピアノ)を使ったり、またサン・マルコ大聖堂の独特の構造(内陣がギリシャ正十字の形)を活かしてステレオ効果やエコーなどを取り入れ、輝かしい色彩効果を持つ優れた宗教音楽を創ったことにあります。

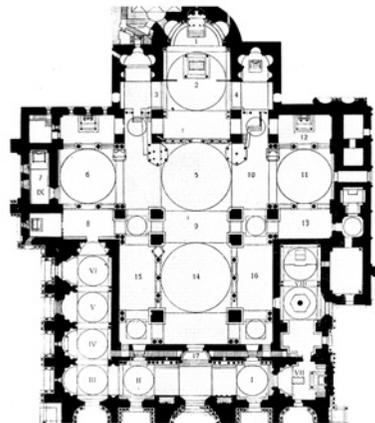
その作品は、1597年に「サクラ・シンフォニア集」、死後1615年に「カンツォーナとソナタ集」として出版され、現代のプラスアンサンプルなどの貴重なレパートリーとなっています。

本日はその「サクラ・シンフォニア集」(1597)より、この演奏会のオープニングを飾るのに相応しい「第9旋法による12声のカンツォーン」を選びました。

この曲は4声のグループが3つのクワイヤ(Choir)に別れて演奏します。楽器の組み合わせは、ツィンク、サクソバット、リコーダー、ヴァイオリン、ヴィオラ・ダ・ガンバ、トランペット、トロンボーン、オルガン等いろいろ考えられますが、今回は第1クワイヤおよび第2クワイヤをそれぞれ2本のトランペットと2本のトロンボーンで、第3クワイヤをオルガンの編成で演奏します。



サン・マルコ大聖堂の外観：4つの丸屋根が特徴



内部平面図：キリスト像を頂点とした十字架形からなり、十字架の左右両端にクワイヤを配置



ジョスカン・デ・プレ : ミレ・レグレ

Josquin Despréz : Mille Régretz

ルネサンスの時代、フランドル地方を中心に、現在の北フランスからオランダにかけての地域出身者で、当時のヨーロッパ音楽に決定的な影響を及ぼした作曲家の一群をフランドル楽派と呼びます。彼らの多くはヨーロッパ各地に赴いて、その地方の音楽的基盤の形成に貢献しました。

その中でも、アルプスを越えてイタリアにやって来たフランドル出身の音楽家たちは、「山の彼方から来た者」という意味で「オルトラモンターノ (oltramontano)」と呼ばれたそうです。

ジョスカン・デ・プレはまさにその中の1人で、サン クワンタンの教会で少年歌手をふりだしに、ミラノへ赴いてはスフォルツァ家やローマ教皇庁の聖歌隊として、フィレンツェではフェッラーラの宮廷楽長として活躍し、晩年にはフランドルに戻りブルゴーニュ地方のコンデ スル エスコーの名誉司祭を務めました。その間、19曲のミサをはじめとする教会音楽やシャンソンを含む多くの世俗音楽を作曲し、それらは当時の模範とされ、フランス・ドイツ・イタリアの作曲家に多大な影響を残しています。

“Mille Régretz”は、当時フランドルやフランスの作曲家の間で大流行したシャンソンの中の1曲で、しばしば「千々の悲しみ」と和訳されます。この頃のシャンソンとはフランス語の歌詞による世俗歌曲を指します。

また、宮廷風恋愛を題材にした歌詞も彼の音楽の特徴を良く表しています。

あなたを見捨て、愛するあなたの顔から遠く離れる千々の後悔
私の悲嘆と苦しみはあまりにも大きく、
人は私の人生がまもなく終わってしまうものと思うことだろう

このシャンソンは、後のフランドル楽派の大家であるティールマン・スザートが編曲し、「シャンソン集11巻」として他の同時代の作品とともに出版しています。実は、スザートは私たちが前回の演奏会で取り上げた大変魅力的な音楽家なのですが、もしかすると晩年フランドルに戻ったジョスカンと若かりし日のスザートの出会いもあったのかもしれませんが。

もうひとつ忘れてはならないのは、この曲の持つ当時の日本の歴史との深淵(しんえん)なつながりです。安土桃山時代の日本では、ヨーロッパとの文化交流を目的に、有馬セミナリヨで学んだ伊東マンショほか、千々石ミゲル、原マルチノ、中浦ジュリアンの4人の少年が「天正遣欧使節」としてはるかなるローマに向けて旅立ちました。(セミナリヨとは、イエズス会の宣教師たちによって開設されたキリスト教を広める為の神学校で、ご当地安土の他、長崎県の有馬にも開設されました。)

ローマで法王に謁見することが遣欧の主目的でしたが、ヴェネツィアでは、今回の演奏会でもとりあげるサン・マルコ大聖堂の楽長アンドレア・ガブリエリによる歓待を受けたことをはじめ、多くのフランドル音楽との出会いも大きな成果でした。長旅の後帰国した彼らは、豊臣秀吉の御前で旅行中に学んだ音楽を奏でたそうです。そして、その中にこの“Mille Régretz”を原曲とするシャンソンもあったとか。(残念ながら、真偽の程ははっきりしていません。)

このような壮大な歴史的背景のもと、本日文芸セミナリヨホールにてこの作品を演奏いたします。

4声からなるシンプルで美しい旋律を、どうぞ悠久(ゆうきゅう)の歴史空間の中でお楽しみください。



アンドレア・ガブリエリ：第12旋法による4声のリチェルカーレ

Andrea Gabrieli : Recercari del duodecimo tuono a 4

アンドレア・ガブリエリはイタリア・ルネサンス音楽の作曲家でオルガニストです。オープニングで演奏したジョヴァンニのおじにあたります。アンドレアの若い頃について詳しいことは分かっていません。1510年頃ヴェネツィアに生まれ、サン・マルコ大聖堂の教会楽長アドリアン・ヴィラールトに師事したと言われていいます。1557年頃にサン・マルコ大聖堂のオルガニストの座を争って破れたために、ヴェネツィア共和国カンナレジオ地区のオルガニストとなったことが分かっています。1566年によろやくサン・マルコ大聖堂オルガニストに選任され、終生この地位にありました。

アンドレアは、ヴェネツィア楽派の第一世代に当たり、複合唱の手法を駆使した宗教的な声楽曲、合奏曲やオルガン曲を作曲しています。また儀式用の音楽も数多く作曲していて、例えば、レバントの海戦における勝利を祝した機会音楽（今風に言うとイベントの委託作品）のほか、天正遣欧少年使節の謁見（えっけん）のために音楽を作曲しています。

「第12旋法のリチェルカーレ」は、1589年にヴェネツィアで出版された「アンドレア・ガブリエリのマドリガルとリチェルカーレ集」に収められています。ヴィオール（ヴィオラ・ダ・ガンバ）のような楽器の四重奏のために作曲された音楽ですが、金管楽器やオルガンで演奏することもできます。金管楽器では、フィリップ・ジョーンズ・プラス・アンサンブル（PJBE）の演奏が知られています。

リチェルカーレ（recercari）とは「探求」を意味するイタリア語で、ルネッサンス期に発達した模倣楽曲の様式の1つです。この名称は15世紀にはすでに用いられていましたが、同様に模倣楽曲を指すファンタジアやカンツォーナなどと厳密な区別はなかったようです。

様式はいくつかの声部からなり、曲の冒頭で1つの声部に示された主題が次々と他の声部に模倣されていきます。17世紀までは様々な作曲家がリチェルカーレを作曲しましたが、次第にフーガに取って代わられることになります。

私たちは、安土桃山時代に作曲されたこの曲を、また天正遣欧少年使節とゆかりのあるアンドレアの曲を本日演奏できることを楽しみにしてきました。

それでは、金管楽器によるイタリア・ルネサンスの響きをお届けします。



ヨハン・セバスティアン・バッハ：カンタータ 147 番より「主よ、人の望みの喜びを」

Johann Sebastian Bach : Kantate BWV147

バッハがドイツ・ライプツィヒの「トーマスカントール」の職に就いたのは1723年、38歳の時でした。それから27年間という年月をこの地で過ごし、バッハはこの地に骨を埋めることとなります。

ライプツィヒでは、教会暦に定められた日曜日と祝日に、礼拝に際してオーケストラ伴奏付きの多声音楽(カンタータ)が、二つの主要教会、聖トーマスと聖ニコライで交互に演奏されることになっていて、その作曲から練習、上演までの担当は「聖トーマス教会カントール」、通称「トーマスカントール」と呼ばれる地位にある音楽家の務めでした。カンタータとは、器楽伴奏付のアリア、重唱、合唱等で構成される声楽曲の一種です。

教会の礼拝時に、説教の補助や気分昂揚のために演奏されたもので、バッハの200曲に及ぶ作品がその頂点を築きました。

「主よ、人の望みの喜びを」のタイトルで広く知られているこのコラルは、カンタータ147番「心と口と行いと生き様は」(原題 Herz und Mund und Tat und Leben)に含まれています。2つの部分に分かれたこのカンタータの最後の曲(第6曲、第10曲)として配置されていて、それぞれマルティン・ヤーンの「イエスよ、わが魂の喜び(Jesu Meiner Seelen Wonne)」の第6節、第16節の歌詞で歌われています。ヴァイオリンやオーボエなどで奏される3連符形のリトルネロ(ritornello [イタリア語で復帰の意味]: 声楽作品への器楽導入部)に続いて、コラルが1行1行簡素な4声体で歌われていきます。リトルネロの主題は、ときには伴奏として、そしてときには間奏として用いられ、最後は再び器楽のみのリトルネロとして曲を閉じます。

カンタータ147番は「マリアのエリザベト訪問の祝日」(毎年7月2日)のための音楽で、バッハがライプツィヒに赴任した1723年に初演されました。ただし音楽は全面的に書き下ろされたものではなく、ヴァイマル時代にすでに作曲していた同名のカンタータ(1716年待降節第4日曜日用、BWV147a)を改作したものです。

この曲は第6回演奏会でも金管10重奏で取り上げましたが、本日は3連符形を奏でる管弦楽セクションの部分をオルガンで、合唱の部分を金管5重奏で演奏いたします。

イエスは変わりなきわが喜び、
わが心を慰めうるおす生命の君、
イエスはもろもろの禍を防ぎ、
わがいのちの力、
わが目の喜び楽しむ太陽、
わがたましいの宝また嬉しき宿りとなりたもう。
ゆえにわれはイエスをば離すまじ、
この心と眼を注ぎまつりて。



ヨハン・セバスチャン・バッハ：パッサカリア ハ短調 BWV582

Johann Sebastian Bach : Passacaglia C-moll BWV582

バッハはバロック音楽の頂点に立つ作曲家です。バッハの残したオルガン作品は約250曲あり、彼自身、とても優れたオルガニストでした。オルガンという楽器は、バッハにとってとても大切なものだったのです。

パッサカリアは、ある一定の主題が低音部で何回も繰り返され、その上に、他の声部の対旋律や和音が装飾的に変奏される形式で、バッハ以前の作曲家に多く用いられました。バッハは、パッサカリアを、唯一この作品しか残していません。ペダルで奏される主題にはじまり、様々な装飾を施された20の変奏が色彩豊かに展開していきます。その後、パッサカリア主題から用いられた主題による壮大なフーガに続きます。オルガン音楽の最高傑作です。



リヒャルト・シュトラウス：ヨハネ騎士修道会の荘重な入場

Richard Strauss : Feierlicher Einzug der Ritter des Johanniterordens

リヒャルト・シュトラウスは、この行進曲を1909年に聖ヨハネ騎士修道会()のために作曲しました。オリジナルの編成は、トランペット15、ホルン4、トロンボーン4、チューバ2とティンパニで、金管合奏としては大変大きな編成となっています。また翌年の1910年には、リヒャルト・シュトラウスの認可の下に、マックス・レーガーがオルガンのために編曲しました。本日は、セミナリヨのオルガン(レーガー版)と、KFAB(オリジナル版)の音とを融合させ、更に荘重な響きの行進曲をお聴きください。

()騎士修道会は、十字軍時代に聖地エルサレムへの巡礼者を防衛、援助、救護する目的のために創設された、中世のローマ・カトリックの修道会のことです。聖ヨハネ騎士修道会は、現在マルタ騎士団として、国際連合にオブザーバーとして参加する主権実体となっています。ブランデンブルク管轄の聖ヨハネ騎士修道会は、公式HPでこの曲をBGMとして取り上げており、テーマ曲となっています。

<http://www.christusrex.org/www1/gtl/smom/osjbrand.htm>



聖ヨハネ騎士修道会の十字架の勲章



マルタ騎士団の紋章



ヤン・ヴァン・デル・ロースト : 金管 5 重奏とオルガンのためのイントラダ
Jan Van der Roost : INTRADA for Brass Quintet and Organ

「なんじゃこりゃ～(松田優作風)」
「ほおお～～～～っ！」
「むっちゃかっこえ～！」

この曲を初めてオルガンと合わせたときの奏者と、客席で聞いていたメンバーの感想です。オルガンと金管 5 重奏と一緒に演奏することがこんなに気持ちの良いものなんだという感動と、オルガンが入る事により、こんなにもサウンドに迫力が増すのか、という驚きの声でした。

この曲を作曲したヤン・ヴァン・デル・ローストはベルギーの作曲家です。1956年3月1日にベルギーのアントワープ県ドゥッフエル(Duffel)で生まれました。フルネームはヤン・フランス・ヨーゼフ・ヴァン＝デル＝ロースト(Jan Frans Joseph Van der Roost)ですが、音楽活動のクレジットにはショートネームのヤン・ヴァン・デル・ローストを使っています。1979年ルーヴェン(Leuven)のレマンズ音楽院でトロンボーン、音楽理論、音楽教育のディプロマを取得し、その後、王立ヘント音楽学校とアントワープ音楽大学でも学びます。現在はベルギーのレマンズ音楽院で教鞭を執るほか、東京ミュージック&メディアアーツ尚美と名古屋芸術大学の客員教授も務めています。

日本ではプラスバンドや吹奏楽向けの作品が有名ですが、声楽曲、室内楽曲なども多く手がけておりその活動は実に多彩で精力的です。吹奏楽の分野では、現在非常に人気の高い作曲家の一人です。

「イントラダ」は、1981年に彼の友人(HansとFabienne Vervenne)の結婚式で演奏するために作曲した曲で、荘厳な響きと華やかなメロディが、結婚式をよりいっそう盛り上げる作品となっています。また、この曲はとても評判がよかったため、オルガンとプラスアンサンブルのために編曲され、別の機会でもたびたび演奏されています。それでは彼の作品でも珍しい、一味違うプラスとオルガンの響きをお楽しみください。



ジョルジュ・バルボトゥ : シャンソナリ
Georges Barboteu : Chansonnerie

「いらっしゃいませ。シャンソナリへようこそ。楽しいシャンソンがいっぱい詰まっている楽しいお店ですよ。どうぞごゆっくり、シャンソンのひとときをお楽しみください。」

「シャンソナリ」のタイトルに含まれる「シャンソン」とは、フランス語で「歌」を意味します。フランス各地の民謡や古謡を編集し、金管 5 重奏用に編曲したこの曲は、まるでシャンソンがぎっしり詰まった楽しいお店のようです。シャンソン店、とイメージするだけで、楽しい何かが始まりそうな予感がしてきます。どんな色のどんな香りのどんな雰囲気のお店かは、ひとりひとりのお客様の感じる



G. バルボトゥ

まま…。

編曲者ジョルジュ・バルボトゥは、1924年北アフリカのアルジェに生まれ、アルジェのコンセルバトワールでホルンの教授をしていた父の下で9歳からホルンを学び、わずか11歳でコンセルバトワールで優勝しています。その後は、14歳でアルジェ放送交響楽団に入団、フランスに渡ってからはフランス国立管弦楽団、パリ・オペラ・コミック管弦楽団のホルン奏者を経て、パリ・コンサーツ・ラムルー管弦楽団の首席ホルン奏者、更にはパリ管弦楽団のソロ・ホルン奏者も務めました。1969～1989年にはパリ・コンセルバトワールのホルンの教授を務め、また、アルス・ノヴァ金管5重奏団の創立メンバーとして、自分自身の作曲・編曲による多くの作品を録音しています。

この曲は2部から成り、16曲のメロディーがいろいろなバリエーションとユーモアに満ちあふれ、絶え間なく続いていく「ポ・プリ(メドレー)」です。16曲の中には、日本の子ども達に親しまれている童謡もいくつかあります。「ジャック兄さん(フレールジャック)」は、幼稚園などで「ぐうちよきばあでなにつくろう」の楽しい手遊び歌として親しまれています。日本語で「鐘が鳴る」や、英語で「Are you sleeping」などいろんな歌詞でも歌われています。

「アビニョンの橋の上で」は「橋の上で楽しく踊ろう…おばさんが通る おじさんも通る…」という歌詞で繰り返すを楽しむ曲。「月の光」は、ピアノ曲としてもきいたことがあるかもしれませんが、ゆったりとした美しい曲です。「どうやってキャベツを植えるか知ってる?」は、手で植えるだけでなく、頭で植えたり鼻で植えたり…と体の部位を動かしながら歌うユーモアたっぷりの曲、などなど…。

また、「聖なる子どもが生まれた」は、クリスマスの曲ですが、5人全員によるコーラルで高らかに歌い上げ、唐突にラップの「つつこみ」が入り、また次の曲へと展開されていきます。こうした、漫才のような「つつこみ」や「ボケ」が曲の途中や曲間で随所にみられ、演奏している私達も、「そこ、もっとずっとこけやなあかん～」とダメだし(?)をしながら、本日まで楽しく練習してまいりました。

絶え間なく続いていくメドレーの中で、みなさんの知っている曲が何曲でてくるでしょうか?私達にもタイトル不明の曲がありますので、お分かりの方は、是非ご連絡を。ちなみに16曲の中には入っていませんが、日本でおなじみの「きらきらぼし」や「むすんでひらいて」も実は、フランス童謡、いわゆる「シャンソン」なのですよ。

初めて聴く曲もたくさんあると思いますが、フランス民謡のおもしろさや美しさ、彼の編曲の楽しさが、お客様と一緒に味わうことができれば、何よりの喜びです。

最後に、このような楽しいプラスアンサンブルの曲を編曲して、昨年の秋に逝去された、ジョルジュ・バルボトゥ氏への追悼の意をこめて、本日はノリノリで演奏したいと思います。

- | | | |
|----|---|----------------------|
| 1 | Malbrouth s'en va en guerre. | マルブロウは戦争に行く |
| 2 | Il etait un petit navire. | それは小さな船でした |
| 3 | Ainsi font les petites marionettes. | 小さなあやつり人形のように |
| 4 | Savez- vous planter les choux? | どうやってキャベツを植えるか知ってる？ |
| 5 | Il est ne le divin enfant. | 聖なる子供が生まれた |
| 6 | Frere Jacques. | ジャック兄さん（フレールジャック） |
| 7 | C'est la mere Michele qui a perdu son chat. | 猫をなくしたミシェル母さん |
| 8 | Sur le pont d'Avignon. | アビニョンの橋の上で |
| 9 | Au claire de la lune. | 月の光 |
| 10 | Nous n'irons plus au bois. | 森の中にはもう行かないよ |
| 11 | (不 明) | |
| 12 | Cadet Roussel. | 小さなルッセル |
| 13 | (不 明) | |
| 14 | J'ai du bon tabac dans ma tabatiere. | 私のタバコ入れの中にはいいタバコがある。 |
| 15 | L'as tu vu la casquette? | 父さんの帽子を見た？ |
| 16 | Alouette. | ひばり |



ジャック・ニコラ・レーメンズ : 祈り

Jacques-Nicolas Lemmens : Prière

レーメンズは、ベルギーのワテルロウ生まれのオルガニスト、作曲家です。特にオルガン演奏では、パッハの直系に属するといわれています。ブリュッセル音楽院のオルガン教授をつとめ、オルガンソナタ、コンチェルトやオルガン教本など、たくさんのオルガン曲を作曲しました。「祈り」というタイトルの小さな作品を多く残しています。作品の中には、同じベルギー生まれのフランクと相通じるカトリック的な甘味さと美しさがあり、フランス的な傾向が強くなっています。



ウジェーヌ・ジグー : トッカータ

Eugène Gigout : Toccata

ジグーは、フランスの作曲家です。パリのサン・ギュスタン教会のオルガニストをつとめていました。ヨーロッパ各地にオルガン演奏旅行を行い、とくに即興演奏の名手として名声を博していました。彼は、多数のオルガン作品を残していますが、この「トッカータ」は『10の小品』の第4曲目にあたり、彼の作品の中では好んで演奏されます。

トッカータの語源は“タッチ”。鍵盤に触れる = 常に鍵盤に触れているほど激しく演奏される音楽形式です。

息もつかせない速いメロディーと、音楽が壮大に展開されていく様が印象的でオルガンの重厚で輝かしい響きが十分に活かされています。



ヤン・クツィール : 教会ソナタ

Jan Koetsier : Sonata da Chiesa Op.146

- . Variationen über ein Lied von Karl Löwe
- . Andante molto sostenuto über
 - “ O welt,ich muss dich lassen ” von Heinrich Isaak
- . Allegro moderato über
 - “ So nimm denn meine Hände ” von Friedrich Silcher

この「教会ソナタ」は、南チロル・ウインド・アンサンブルのために1996年に作曲され、初演は1998年4月18日にPJBEのリーダーであるフィリップ・ジョーンズの指揮により行われています。

タイトルの「教会ソナタ」というのは、バロック時代の器楽形式の一つで、元々は、緩 - 急 - 緩 - 急の楽章を持ち、舞曲を中心に構成された「室内ソナタ」に対して、舞曲の楽章を含まない抽象的な楽章により構成され、教会での演奏、あるいは教会風の雰囲気を用意した真面目で重々しい印象の曲想であることが多いようです。17世紀の後半以降に興隆し、コレッリのトリオ・ソナタが規範とされています。

クツィールは、今日広く知られているヴァイオリンやピアノなどの器楽曲「ソナタ」の形式に従い、急 - 緩 - 急の3楽章からなる「ソナタ」の中に、自らが研究した各時代の曲の要素、雰囲気を採り入れようとしたのではないかと思います。

第12回で演奏した「ソナタ・ブライクラシカ」では、バッハ、ヒンデミットの作品、作風を投影したものですが、ここでは、ドイツに古くから伝わるリート (“Lied”: 歌曲) をテーマに、「教会風」を見出そうとしたものでしょう。南ドイツ・ウインド・アンサンブルの録音したCDには、この曲について、難曲であるが非常にやりがいのある作品 (“ein schwieriges aber dankbares dreisätziges werk”) であるというコメントが付けられています。

3つの楽章は、いずれも同じ旋律を導入に用い、その後に変奏曲を繋げる形式を採っています。

第1楽章は、ドイツ初期ロマン派の歌手・作曲家であるヨハン・カール・ゴットフリート・レーヴェ (1796 ~ 1869) のリート「北欧の船乗りの歌」 (“Nordisches Seelied”) を主題に、高度な技術を要する5つの変奏が展開されます。レーヴェは、今日ではあまり知られていませんが、「バラード」と呼ばれる歌曲 (“Ballade”: 劇的な内容の叙事詩に曲を付けたもので、今日よく知られているポピュラーソングなどの “Ballad”: バラッドとは異なる。) の確立者でもありました。代表作の一つに文豪ゲーテの詩に曲を付けた「魔王」があり、これはほぼ同じ時期にシューベルトも作曲していて、こちらの方が有名になっています。

第2楽章は、フランドル楽派の作曲家で、多くの無伴奏合唱による宗教音楽、世俗音楽を残したハインリヒ・イザーク (1450頃 ~ 1517) の1539年作のリート「インスブルックよ さようなら」をモチーフにした優雅で美しい緩徐楽章です。中間部にはクツィールらしい現代的な響きによる激しい葛藤を思わせる部分が現れますが、やがて静まってゆき、再びフリーゲルホルンによりモチーフが歌われ、静かな祈りにより曲を閉じます。

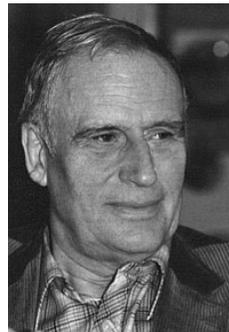
第3楽章は、「ローレイ」の作曲者として日本でも知られるドイツの作曲家フリードリヒ・ジルヒャー (1789 ~ 1860) のリート「私の手をとって」を基にしています。ホルンを中心とした穏やかなテーマと、トランペットによる華やかな装飾の対比に続いて、冒頭のテーマも重なり合って壮大なクライマックスを迎えます。

ヤン・クツィールは、1911年8月14日にオランダのアムステルダムに生まれ、後にドイツに移り作曲家、指揮者として活躍しました。とりわけ、金管楽器に対する深い造詣から生まれた数多くのプラスアンサンプル作品は、PJBEなどの多くの優れた演奏により広く世界に紹介され、貴重なレパートリーとなっています。

残念ながら、昨年の4月28日にドイツのミュンヘンで亡くなりました。(享年94歳)

彼の作品を多く出版してきたスイスの出版社の代表であるジャン・ピエール・マテ氏は、クツィールの死を悼んでプラス・ブリテン誌への寄稿の中で次のように語っています。

「ユーモアを散りばめた快活なネオ・バロック風の書法は、いわゆる前衛的なトレンドとは程遠いものだが、永遠の歡喜に満ちた樂興の時を演奏者と聴き手に与えてくれる。」



J. クツィール

素顔のKFAB ~ 海外編 ~

私たちが取り上げる作品の多くは欧州や米州生まれである。そういった作品を理解するには、楽譜に書かれたことに加えてやはり現地の情報収集が不可欠になる。作品に込められたテーマや想いは勿論のこと、作曲された場所はどこ？風景は？言葉は何語？時代は？社会は？宗教は？など興味を挙げればきりがない。作品の背景にこだわった曲創りを進めてきた結果、KFABの日常には海外との接点がそこそこに見られるようになった。

「ブラス・アンサンブルの故郷は、というと？」

「現代の隆盛の起源で言うと英国やろなあ。あのフィリップ・ジョーンズ・ブラス・アンサンブルの地元やしな。」

「KFABの第1回演奏会は「ロンドンの小景（G.ラングフォード作曲）」がメインやったよね。」

「そう。俺は何せロンドンの小景を吹いてみたかったから、初めて楽譜を手にした時は涙が出るほど嬉しかったわ。楽譜の存在など知らぬ頃、現地に出向いて実際の情景を全部見てきたんや。おかげであのときの曲づくりはリアルやったでえ。」

「もう少し広く北欧という考え方もありますよね。」

「シベリウスやエワルドの時代にも盛んに演奏されたいいな。当時の作品には6重奏とか7重奏などが多いのが特徴らしいで。」

「そう言えば、クツィール先生はオランダ人でしたよね。今のオランダは欧州内でもかなり盛んな地域なのかな？」

「それは言えるな。金管が盛なんやろなあ。日本ではあまりなじみのないオランダ語やけど、そもそも「Koetsier」はどんな『音』なのかオランダ語で呼んでもらったんや。『くうえつゐるう』。何度も聞いて議論した結果、KFAB的にはクツィールがベスト、となった訳。」

「金管と言えばアメリカ大陸にも名人が沢山おられますね。」

「カナディアンブラス、エンパイアブラスはまさしく老舗のメジャーやな。シカゴ、ニューヨーク、ボストン・・・など、各オーケストラメンバーによる金管アンサンブル隊の設定も多数。そーいや米国に赴任していたメンバーもちらほらあったな。金髪の彼女が何とか？言っていた。」

「プレムルやユーパーなどの作曲家は米国の方々。ジャズやミュージカルなどの米国由来の作品や編曲が沢山あるし、私たちもこれまで沢山取り組んできました。」

「それと、最近の大編成ブラスはジャーマンブラスによる開拓が積極的やな。ドイツ独特の重厚で緻密なサウンドが魅力的。ベルリンフィルメンバーによるアンサンブルもよく来日する。」

「KFABにはジャーマンスタイルを好むメンバーが多いですね。サウンドづくりにも少なからず影響を受けていると思います。いわゆるドイツ管がこれだけごろごろしている団体はそうは無いかも。」

「中身は勿論、形も大事ということ。ドイツのオケマンたちともすっかり飲み友達、ドイツ語を熱心に勉強するメンバーもいる。KFABでは毎年のように誰かがドイツを旅しているが、昨年はずいぶん一部のメンバーがNABEOの一員として演奏旅行に訪独したんや。」

「そのうち、住む輩が出ないとも限らん勢いですね。」

KFABの曲創りはメンバー全員が作品の背景や構成を研究するところから始まる。クラシック音楽はもちろんのこと、現代ものの作品でも原語の情報を解読したり、時として作曲者本人とやりとりしたり。勿論全てがわかるわけではないから、自らの想像力で補うのが演奏者であるが、調べていけばナルホドと見えてくることもしばしば。KFABのマニアぶりは、このような「原典主義」にも垣間見ることができるのである。

つれづれなるままに

ラッパ吹きのエッセイ Vol.11

若き少年達が聖マルコで耳にしたオルガンの音は彼らの心にどのように響いたのであろうか...

彼らがイタリアから日本に持ち帰った大きなものの一つが音楽と楽器であったことが興味深い。いまだかつて聴いたことのない西洋の音楽をどう感じ、どういう気持ちで楽器を奏でたのであろうか。

彼ら4人はすでに「アンサンブル」というものに目覚めたのではないかと思う。

我々は個々の感性とお互いを感じる気持ちが響き合うことがアンサンブルそのものであると考える。

彼らは和声を伴う様々な楽器の組み合わせによる新たな響きを感じ、人と音楽する喜びを感じていたのであろう。

音ははかなく消えてゆくものであるが、聖マルコで響いた音は彼らの心に響き続け、400年以上もの時を経て現代の我々の心までも響き続けているのかもしれない。

我々KFABが愛したクツィール氏が昨年93歳でこの世を去った。

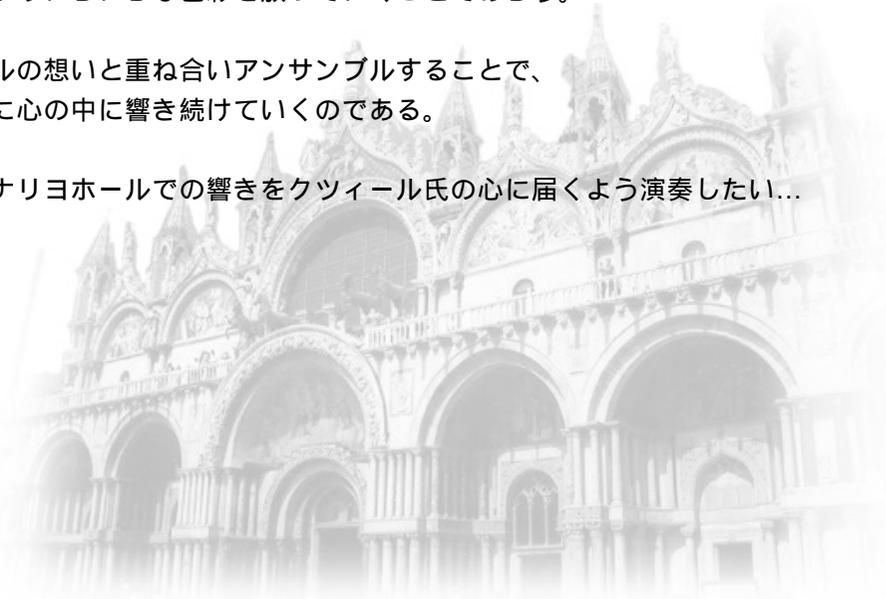
晩年まで作品を書き続け、特にプラスアンサンブルの作品には心惹かれるものが多い。

いまや新たな作品は生み出されてこないが、

後世の演奏者によりいろいろな色彩を放っていくことであらう。

我々もクツィールの想いと重ね合いアンサンブルすることで、彼の音楽は永遠に心の中に響き続けていくのである。

今日のこのセミナリヨホールでの響きをクツィール氏の心に届くよう演奏したい...



演奏者

G. ガブリエリ：第 9 旋法による 12 声のカンツォーン

Chor Tp1 貝發, Tp2 伊豆田(恭), Tb1 奥山, Tb2 藤本

Chor Tp1 能勢, Tp2 浅野, Tb1 田中, Tb2 小野

Chor Org 城

J. デ・プレ：ミレ・レグレ

Tp1 浅野, Tp2 伊豆田(恭), Tb 奥山, Tb2 藤本

A. ガブリエリ：第 12 旋法による 4 声のリチェルカーレ

Tp1 北村(美), Tp2 北村(雅), Tb1 田中, Tb2 小野

J. S. バッハ：カンタータ 147 番より「主よ、人の望みの喜びを」

Tp1 浅野, Tp2 北村(雅), Tb1 田中, Tb2 藤岡, Tb3 藤本

Org 城

J. S. バッハ：パッサカリア 八短調 BWV582

Org 城

R. シュトラウス：ヨハネ騎士修道会の荘重な入場

Tp 貝發, 伊豆田(和), 浅野, 北村(雅), 能勢, 伊豆田(恭), 鶴田, 北村(美), 加悦

Hr 古市, 井田

Tb 藤岡, 奥山, 小野, 藤本

Tuba 竹内, 峯松

Timp 堀内

Org 城

J. ヴァン・デル・ロースト：金管 5 重奏とオルガンのためのイントラダー

Tp1 北村(美), Tp2 伊豆田(和), Hr 古市, Tb 藤岡, Tuba 竹内

Org 城

G. バルボトゥ：シャンソナリ

Tp1 貝發, Tp2 能勢, Hr 井田, Tb 奥山, Tuba 峯松

N. J. レーメンス：祈り

Org 城

E. ジグー：トッカータ

Org 城

J. クツィール：教会ソナタ

Tp1 貝發, Tp2 能勢, Tp3 北村(美), Tp4 北村(雅), Hr 古市

Tb1 田中, Tb2 奥山, Tb3 藤岡, Tb4 小野, Tuba 竹内

団員名簿

Trumpet

浅野 弥生
伊豆田 和也
伊豆田 恭子
貝發 達也
加悦 愛子
北村 雅紀
北村 美繁
鶴田 鋼司
能勢 秀之

Horn

井田 右安子
北脇 知己
來島 由明
野々口 義典
古市 道和

Trombone

奥山 あや
坂根 通寿
田中 嘉
藤岡 信昌
南 明

Bass Trombone

小野 道生
藤本 雅巳

Tuba

竹内 信也
峯松 勲

Timpani

堀内 妙子(団友)

共 演

Organ

城 奈緒美

京都ファインアーツ・プラス 第14回演奏会

主催：京都ファインアーツ・プラス

共催：文芸セナリヨ(財)安土町文芸の郷振興事業団

印刷：(株)コームラ

